

生前 **SE** I used to be
a System Engineer,
but now... やってた俺は
 異世界で...
3

大樹寺ひばごん
Daijuuji Hibagon

目次

第一章 日本人の好きなもの 7

第二章 村に秋がやってきた 135



タニア・シャル

ロディの幼馴染その2。
快活でよく笑う。

ロディフィス・マクガレオス (ロディ)

過労死で異世界に転生した
元システムエンジニア。
まったりゆっくり
人生を目指す。

リュド・シャル

タニアの兄で、グライスとは
親友同士。ちよくちよく
ロディをからかう。

イスツード・ハロリア

商隊を率いる
若いニイチャン。
商人として成り上がる
野望あり。

シルヴィア・バヴォーニ

村長の孫娘。
村にやってきたばかりで、
友達が少ない。

登場人物 紹介

グライス・ハインツ

ミーシャの兄。また、
ロディの兄貴分にして良き友人。

ミーシャ・ハインツ

ロディの幼馴染。
おっとり気味で素朴な性格。

アリシア・マクガレオス (アーリー)

ロディの双子の妹。
いつも眠たげ。

レティシア・マクガレオス (レティ)

ロディの双子の妹。
元気で明るい。

第一章

日本人の好きなもの

一話 ロディフィスの悲願

「「ありがとお—ございましたあ—」」

ガキ共が、声を揃えて一斉に頭を下げる。

勿論、その「ガキ共」の中には、この俺、ロディフィス・マクガレオスだつてきつちり含まれている訳だが……

俺たちは今、丁度護身剣術の授業を終えて、自警団から教練のために出張つて来てくれた先生たちに向かつて終了の挨拶をしているところだった。

辺境にあるこんな田舎の村では、「自分たちの身は自分たちの手で守る」それが当たり前のこととされている。

もし仮に、何か不測の事態に陥つたとしても、隣村に助けを呼びに行くなんて簡単にはできない。なにせ、馬（つばい生き物）をとばしても一日は掛かるくらい離れているのだ。

故に、子どものうちから少しずつでも戦う術を知っていかなければ、いざという時、何も、誰も、守れはしない。

とはいえ、ここアストリアス王国はしばらく戦争もしていないような、比較的平和な国だ。そんな

なに肩肘を張る必要もないだろう、と俺は思うのだが……

極稀に、野盗が出たという話も聞くには聞くが、専ら大きな街道沿いで隊商が襲われたという噂が届くくらいで、現物なんて見たこともない。

まあ、見たいとは思わないけどな……

そもそも、奴らが狙っているのは金持ちの商人などが持っている商品や金品な訳だから、こんななぐんにもないビンボー村を襲つても得になることなんて何一つない。それが、この村が安全である理由の一つだ。

それにもし犯罪を犯して「お尋ね者」にでもなろうものなら、そこから賞金稼ぎたち——俗に、冒険者と呼ばれている連中——に付け回されるのがオチだ。

この国には治安を維持する保安機構のようなもの——自警団なんかがその代表だ——はあるものの、犯罪者を取り締まる警察のようなものはない。

代わりに、そういった犯罪者は国や自治体から「賞金」を掛けられ、冒険者組合を通して、全国に一斉指名手配される。

短期間で確保すると賞金が上乗せされる、というシステムもあり、その検挙率（？）は意外と高いらしい。

じーさんたちの話でも、ここ数十年はそういった「野盗に襲われる」ような事案は発生していないそうなので、俺たちが実際に野盗相手に切った張つたをするということは、まずないだろう。

じーさんたちが若かった頃は結構そういうこともあったようだが、村人が団結して立ち向かい、撃退したそうだ。

その時の武勇伝は、ウチのじーさんから耳がタコになるほど聞かされている。だが、この世界は人間以外にも脅威となるものが存在する。

それが、魔獣だ。

魔獣は通常の獣より体が大きく、そして凶暴なのだという。

ここラッセ村の北側には、魔獣が棲むと言われている大きく深い森が広がっているのだが……残念ながら幸運なのか、俺は生まれてこの方、まだ魔獣というものを一度も見ることがない。

どういう訳か、ここに棲む魔獣は滅多なことでは森の奥深い所からは出て来ないのだとか。

稀に、森の浅い所まで出て来る個体はいるらしいが、それも自警団が巡回などをして早めに討伐しているの、特に問題にはなっていない。

何故、森の奥から出て来ないのか……何か理由があるのか、それともただ引きこもりなだけなのか……

それは分からないが、どちらにしろ村にとつては良いことだ。

そんなこんなで、ここラッセ村は比較的平和であるにせよ、*“転ばぬ先のつつかえ棒”*、*“備えあれば嬉しいな”*という言葉もある。

いつ何時、野盗が襲ってくるとも限らないし、どんな気まぐれで魔獣が群れを成して村にやって

くるかも分からない。

だからこうして、*“備える”*のために、毎日厳しい訓練に身を捧げている、という訳だ。

で、ここ最近気づいたことがあるのだが……それは、どうやら俺には剣術の才能がない、ということだ。

今の体の性能自体は、生前より遥かに優れている。

体は柔らかいし、体力だってある。機敏に動くし、視力もいい。足腰だって丈夫だ。

……生前のあの体はなんだったのか。

はつきり言って、軽自動車とF1カーくらいの性能差があるんじゃないだろうか？ 最早勝負にすらなっていない。

しかし……こと、剣術になるとからつきしだった。

これはもう、体の性能云々関係なく、俺のセンスの問題なのだろう。

素振りをしていると、*“筋は悪くない”*と褒められるのだが、いざ掛かり稽古——格上の者に対して、一方的に攻めの練習をするやつ——となると、棒が相手に当たらない。

避けられるとか、そういう次元の話ではない。

当たらない、のだ。

自分では当てるつもりで振っているのに、手前過ぎて空振りしたり、逆に突っ込み過ぎて体当たりになったりと散々な結果を出している。

ここ最近では、女の子であるタニアを相手にした模擬戦でも連戦連敗中だ。あいつはすばしこくて、冗談抜きで瞬きをしている間に姿をくらますから、もう本当に手に負えない。

素振りも姿勢もメチャクチャ、なのに何故か勝てない……あれはもう獣の動きだ。あいつは野生児に違いない。

タニアだけでなく、同じく幼なじみのグライブにもリウドにも勝ったことがない。

魔術の才能もない、剣術もダメダメ……俺がファンタジー世界に憧れたあれやこれやが、軒並み破綻していくよ……

別に「世界最強になるっ！」なんていうつもりはないが、少しくらい……ほら？　ねえ？

折角こうして、転生なんて奇跡みたいなことを体験している訳だから、「特殊能力で無双」みたいな展開があってもいいのではないでしょうか神様？

……別に神なんて信じちゃいなかったが、「転生」が起きている身としては信じなくてもいい心境だったりする。

ちなみに模擬戦で使う棒は、素振りに使っている硬い棒ではなく、ヘチマのタワシのようなヘコヘコした物だ。

感触としてはウレタンに近く、これなら殴られてもあまり痛くない。

とはいえ、こんな物でポコポコ練習しているのは俺たち幼年期組くらいなもので、グライブたち年長組は素振りに使う硬い棒で打ち合っている。

硬い棒を使うので、もちろん怪我だつてする。が、そこはファンタジー世界だ。

先生役である教会のシスターの一人に、治療系の魔術を使える人がいるので、怪我をした時は皆その人に治療してもらっている。

今日は、彼女の世話になるような怪我を負った者はいなかったのか、先生たちへの挨拶が終わると、皆三々五々自分の家へと帰っていった。

「おーい！　ロディ、今日も川に行くんだろ？」

訓練で自分が使った分の備品を片付けていると、先に片付けを終えたグライブが声をかけてきた。「当たり前だろ？　汗かいてベタベタで気持ち悪いし、この暑さだからなあ……」

日差しはすっかり夏のそれだ。

剣術の訓練は、この炎天下の中で棒切れを振り回すという過酷なものだ。その所為で、汗の量がハンパない。

着ているシャツやパンツを絞ったら、どれだけ汗が滴ることか……

そんな訳で、そのまま帰るのも気持ちが悪いと、近場の川で汗を流してから帰るのが最近の流れになっていた。

勿論、着替え用の服一式が愛用の肩掛けカバンの中に入っている。で……

「それに、今日辺り今作ってる実験機が完成しそうだしさ」

実は、ここ数日俺は荷車に乗って教会学校へと通っている。別に、歩いて行くのが面倒くさいとかそういう訳じゃない。

俺は今、川とある実験をするために、ここ数日間コツコツと下準備を進めていた。その実験の資材を荷車を使って運搬していたのだ。

資材はレンガが主なため、手で持って運ぶには重いのよ……

学校が終わってから資材を回収して川へ向かう、という手もあったが、それだと地理の関係上二度手間三度手間になってしまうので止めた。

そこで、俺は朝早めに家を出て、資材を回収してからその足で学校へ向かう、という方法を探っていた。これなら、わざわざ荷車や資材を取りに戻らなくて済むからな。朝が早くても多少辛いが、後のことを考えればこちらの方が効率はいい。

で、そうして荷物を積んだ荷車を転がして登校していると、たまに同じく登校中のミーシャやタニアと遭遇することがあり、そんな時は一緒に荷車に乗っけて登校したりもしていた。

と、そんなことをしていた所為で、最近では俺が荷車で登校している、というのは学校に通っている者なら誰もが知るところとなっていた。

「あいよー。俺はまだ片付けが残ってるから、荷車の所で待ってるよ。行くのはどうせ、いつもの面子なんだろう？」

「ああ。んじゃ、残りの奴らに声かけてくるわっ！」

そうして、グライプは教会の方へと走っていった。

この暑い中、よく走る気になるものだ……

走り去ったグライプを見送って、俺はまたいそいそと片付けを始めたのだった。

いつもの面子とは、俺、ミーシャ、タニア、グライプ、リュドの五人のことだ。

俺は皆を荷車に乗せると、一路川へと荷車を走らせた。

教会の近くには小さな川が流れている。距離にしたら子どもの足で徒歩五分といったところか。大衆洗濯場のある川に繋がる支流の一本で、一応は洗濯場よりも上流にあることになる。

以前、商人のイシュを連れて行った——行かれた、と言うべきか？——場所も、ここから少し下流に行った所だ。

ここは、村に一番近い水源ではあるのだが、岩が多いわ、道が悪いわで、水を汲んだり洗濯をしたりといった、生活水源にはし難い場所だった。

実際ここで水を調達しているのは、教会に住んでいる神父様くらいなもので、その神父様だって、魔術を使って運搬の負担を軽減していると言っていた。

「そうでもしなければ、わざわざこんな所の水を汲みになんて来やしませんよ」とは、神父様の言だ。

ちなみに……

教会に住んでいるのは神父様だけで、シスターたちはちゃんと別に家があります。

一つ屋根の下、神父様が若い女性三人と一緒に暮らしている、なんていうことはないのです！

川の近くまで来て、俺は荷車^{クララ}を止めた。

ここからは悪路であるため、荷車^{クララ}では先に進めないのだ。とはいえ、川はもう目と鼻の先だ。ゆつくり歩いたって一分もかからない。

ミーシャとタニアは荷車^{クララ}が止まるなり飛び降りると、一目散に川に向かって走っていった。

グライブとリュドには、ここまで運んでやった見返りとして、荷車^{クララ}に積んであった実験資材であるレンガを、川まで運ぶのを手伝わせた。一日五、六個ずつをちまちま運んで今日、ようやく完成……する予定だ。

このレンガはただのレンガではなく、洗濯槽を造るのに使ったのと同じく魔術陣がスタンプされた物だった。

この川は川幅も狭く、水量も少ないので流れが穏やかで、一番深い所でも水深が四〇センチメートルもない浅い川だ。そのため、この季節になるとこは子どもたちの格好の遊び場となる。

そんな川に真っ先に飛び込んだのは、タニアだった……それもマッパで……

パンツすら脱ぎ捨てて、真正正銘の真っ裸で、飛び込んでいったのだ。その後を、グライブ、リュドが追う。勿論こつちもマッパだ。

川岸では、ミーシャがもそもそと服を脱いでいる途中だった。その様子から、ミーシャも全裸で川に入るつもりらしい。

かくいう俺もすでに全裸で川の中である。

……いいじゃない、だって子どもだもの。

生前の年齢と容姿で、全裸で川に入っていたら、猥褻物陳列罪^{わいせつぶつちんれいざい}で速攻御用^{さくこうごよう}となっていたかもしれないが——おまけに全裸の少年少女が近くにいうものなら、罪状がいくつ追加されることや——今は七歳児なので問題ない。

近くでやんややんやと遊ぶガキンちよ共を尻目に、俺は軽く水を被^{かぶ}って汗を流すと、早速作業に取り掛かったのだった。

既に完成しているも同然なので、大した作業はないのだけどね。

……
……
……

と、いう訳で出来上がったのがコレである。

ひと言で言ってしまうと、石を積み上げて作った生簀^{いけす}……の、ようなものだ。

大きさは、横幅二メートル程、奥に一メートル程の大きさで、石を積んだ高さは三〇センチメートルもない。

でもまあ、一応水面は超えているので、実験機としては上出来だろう。

で、この生簀の上流部分には、魔術陣の刻印されたレンガが数列にわたって水面近くまで積み上げられていた。

「おっし！ これで完成だなっ！」

「何が完成したって？」

近くからグライブの声がしたので振り向けば、そこには先ほどまでやいやい遊んでいた面子が雁首揃えて立っていた。

遊ぶのにも飽きたのか、俺の様子を見に近づいてきたようだ。

「で、石をコツコツ、コツコツ積み上げて、小さな大鬼はこの間から一体何作ってんだよ？」

リュドのヤツも、俺が作った生簀が気になるのか、中を覗き込んでいた。

別に、そこには何もうやしないがな。

「ふっふっふー！ 丁度いい、今から実験するからそこで見てなっ！ あっ！ 危ないから石で作った囲いには近づくなよ？ いいな？」

皆が囲い、石で作った囲いから離れるのを確認した上で、俺は積み上げたレンガの一番上の魔術陣に手を突いた。

チリチリとあの魔力を吸い取られる独特の感覚が、手の平全体に広がっていく。

魔力を供給されたことで、魔術陣は……いや、今や魔道具となったレンガの塊は、決められた

手順に則って魔術を発動していく。

時間にしたらなら三〇秒程だろうか……

生簀の中から、次第にゆらゆらと白い靄が立ち上り始めるのが見えた。

俺はそれを確認して、魔道具と化したレンガの塊から手を退けた。

「さってさて、温度は如何程かねえ」

そして、徐に生簀の中へと手を突っ込んで……

「あっちゃやあああー！！！」

あまりの熱さに、慌てて手を引っこ抜いて冷たい川へドボンと浸ける。

加熱時間が長すぎたか……？

煮え立つ程ではなかったが、人がこの中に入るには些か抵抗がある温度ではあった。

バラエティ番組としてなら使えそうだが、俺は普通に使いたいのだ。

この辺りは要調整だな……

「なあ、ロディ……お前、もしかしてお湯を作ったのか？」

ゆらゆら立ち上る湯気を指差して、グライブがそんなことを聞いてきた。

確かに、俺はグライブの言う通りお湯を作った。しかしそれは、真実ではあっても真理ではない。何故なら……

「違うっ！俺が作ったのはお湯じゃないっ！風呂だ！」

その言葉に、誰もがキョートンとした顔で俺のことを見ていた。
無理もないだろう。

この世界で風呂と言ったら、お湯で湿らせた布で体を拭くことだ。

日本のように、お湯を溜めて体を浸す様式は存在しない。もしかしたら、似たようなものがあるかもしれないが、少なくとも俺は知らない。

「といっても、こんな熱湯じゃ流石に入れんな……よしっ！ 水で割るか」

俺はそう言うと、早速川の水をバシャバシャと生簀の中へと注ぎ入れた。

「ほれほれ！ お前らも、ただ突っ立てるくらいなら水入れるのを手伝えっ！」

俺がそう声をかけると、タニアが真っ先に何が楽しいのか笑いながらマネをしだして、次にミーシャが、そしてグライブ、リュドが困惑気味にあとに続いた。

適当なところで一旦作業の手を止めて、近くに転がっていた棒で生簀の中を攪拌、手を入れて温度を確認すると、多少下げ過ぎてしまった感があったが、熱湯よりはましになっていた。

再加熱すると、またあつあつになってしまふ恐れがあったので、今回はこれで良しとする。

「さて、んじやお先に失礼してっ……」

俺は、「よいこらしよっ」と声を上げて石垣を歩き、生簀の中へと入っていく。

所詮、その辺の石で作った囲いなため、囲い付近は石の隙間から冷たい水が流れ込んでしまっていたが、中心部分に向かうに連れて、温度が一定化していく。

そして適当な場所を見繕って、俺はざぶりと腰を落とした。

「つああああ……」

温度が多少低いとか、水かさが低くて肩まで浸かれないとか、石がゴロゴロしている所為でケツが痛いとかとか。とてもそれは、俺が恋焦がれた風呂ではなかった。

だがしかし、この世界に来て初となる日本式の風呂は、それも露天風呂は……間違いない、最高の風呂だった。

「ほら、何してんだよ？ お前らも入って来いよ！ 早くしないと温くなっちゃうぞ？」

生簀の外で、俺の行動をぼけーっと眺めていた四人に声をかける。

「ロディ、お前さっきは危ないから近づくなって言うておいて、今度は入って来いって言うのかよ？」

「魔術陣を動かしてる時は危ないから近づくな、ってことだよ。今は大丈夫」

「じゃあ、あたし入るうー!! ていつ!!」

グライブが不機嫌そうに聞いてきたので、簡潔にそう答えると、代わりにタニアのヤツが勢い良く石垣を飛び越えて生簀の……いや、浴槽の中に飛び込んできた。

そして案の定、バsshャーン！ と盛大な水しぶきが上がる。

「うおおお!! なんだこれ温ったけえー！ ミーシャも来なよ！ 面白いぞっ！」

本来、風呂とは静かに入るものなのだが、タニアのヤツはそんなこと知らんとばかりに――い

や、実際知らないんだが——浴槽の中で手足をバタつかせて遊び出した。

子どもの頃、銭湯の大きな浴槽で誰もが一度はそうするように、本当はタニアもこの浴槽の中を泳ぎたかったのだろう。しかし残念なことに、この即席の浴槽では圧倒的に水かさが少ないのでそれはできなかった。

おかげでバタ足で上がった水しぶきが、俺の顔に掛かること掛かること……

そんな楽しそうにしているタニアに釣られたのか、ミーシャが、そしてグライブ、リュドが続いて浴槽へと入ってきた。

「うわぁ……あつたかい……」

「おいおい、川の水がお湯になっちまったっ！ マジか……」

「ロディ……これ、お前がやったのか？」

「まあなっ！」

困惑したような表情でそう聞いてきたグライブに、俺はドヤ顔で答えてやった。

タニアは相変わらず笑いながらバタバタと暴れ、グライブとリュドは不思議そうな顔で水面を眺め、ミーシャはほけーっとした顔で俺の隣で湯に浸かる……

そんな風に思い思いに風呂を楽しんだ俺たちだったが、それも二〇分もしないうちに終わりを迎えてしまった。

浴槽のお湯が、もうお湯とは呼べないくらいに冷めてしまったのだ。

元々、隙間だらけの石垣で作った囲いだ。浴槽内には随時、冷たい水が入り込み、中のお湯は外に出てしまっていたのだから仕方がない。

が、こんなものはあくまで実験の一端に過ぎない。

今回の真の目的であった、加熱魔術陣の実験が成功を見た今、浴槽の問題点など最早些末事。あとで如何様にもすればいい。

これで作れるっ！ と、俺は確信していた。一度は諦めた、日本式の風呂っ！

俺は、この村に日本式の風呂を再現するっ！ そして、毎日あつあつの風呂に入るのだっ！
そうと決まれば、早速準備開始だ。

二話 布教活動はじめました

「で、どうっすかね神父様？」

俺がそう問うと、神父様は難しい顔で目を閉じた。そしてしばらくして……

「ふむ、そうですね……」

神父様は閉じていた目をゆっくりと開くと、言葉を選ぶように静かに続ける。

「……ロディフィス。君が言う“風呂”というのがどういうものなのか、言葉だけでは私にはよく

分かりません。しかし本当にそんなに素晴らしいものであるのなら、小規模でもいいので実際に作ってみる、というのが皆の理解を得られる一番の近道ではないでしょうか。そしてそれが本当に素晴らしいものであるなら、使った者の内から自然と要望する声が出るでしょうし、出なければそれまでのことです」

最後の方は若干の苦笑を交じえて、神父様はそう言った。

ふむ、やはり正攻法しかないか……

いくら幾千幾万の言葉を重ねたとしても、「風呂」の良さを伝えるのは難しい。それだけで、賛同者を募るのには無理がある。

良さを理解してもらうには、実際に入ってもらうのが一番手っ取り早い、ということなのだろうな。

俺は神父様に相談をするために、朝も早くから教会へと足を運んでいた。

今日は数日に一度の礼拝日で、学校はお休みだ。しかし、神父様はこのあと村人相手の説法や何やらで忙しくなるため、相談を持ち掛けるにはこのタイミングしかなかった。

俺からの相談とは、ずばり村人たちに「風呂」が受け入れられるようにするには、どうすればいいか？ というものだ。

今回の俺の目標は、村に「銭湯」を建設することである。やはり風呂は大きい方が気分が良い。

元々は個人用の小ぢんまりとしたものを作るつもりだったのだが……リバーシの販売で得た思わぬ収入で気が変わった。

俺はあの金で、この村に大型スパ・リゾートを建設するのだっ！

……あつ、いや、流石にそれはムリだって分かっているのだから「スーパー銭湯」的なものが造ればいいなあ、と考えている。

しかし仮に銭湯造ったとしても、それが盛況となるかどうかは現状未知数だ。

だって、お湯に浸かるという「日本式の風呂」などこの世界には存在しないからな。受け入れられるのか拒絶されるのか、それすら分からない。

銭湯を造るとなると工事の規模も資材の量も、大衆洗濯場の比ではない程大掛かりになってしまう。

大金を投入して造った方がいいが、人気が出ませんでした、では流石に笑い話にもなりはしない。俺は銭湯に、そんな勢いだけで造ったどこぞの行政の箱物みたいな末路を辿らせたくはなかった。

そこで、俺は神父様に銭湯計画の全容を話し、この「風呂」という概念が受け入れられるか、拒絶されるのか、受け入れられるにはどうしたいのか、とそんなことを相談したのだ。

まあ、結果は「正攻法で攻めろ」という無難なアドバイスで終わってしまったが。

しかし、よくよく考えれば大衆洗濯場だって、元は主婦の皆様方からの熱い要望によって「洗濯場を作ろう」という流れになっていったのだから、それと同じことを銭湯でやればいいだけか。

まあ、直接的な原因は各家庭用の試作型洗濯機が大破してしまったからなんだけど……

そもそも銭湯建設の資金は、村の人たちがリバーシを作って稼いでくれたものだ。なら、彼らが喜んでくれるものでなければ意味がない。

流石の俺だって、あれだけの大金を自分勝手な理由で使うのは気が引けるからな。

よしっ！ そうと決まれば、早速「日本式の風呂」のサンプルを作ろうではないか！

最悪、誰からも評価してもらえなかった時は、今後そのサンプルは俺が個人的に使うだけの話なので、何の問題もない。

と、いう訳でそれから数日が経ち……

「日本式の風呂」のサンプルが完成した。思いの外簡単に仕上がったな……

俺だけ免除されている学校の一時間目の読み書きの時間、そして授業後の恒例となった水浴びの時間、この二つの時間を使って俺は作業に没頭した。

勿論、グライブとリュドは十分に扱き使ってなっ！

ミーシャとタニアはどうしたかって？

あの子たちは何も言わなくても、進んで手伝ってくれる良い子たちなので、特に何も言っていない。

そうだ、今度イスユの隊商が来た時には、何か好きな物でも買ってあげよう。グライブたちは知

らん。自分で好きなものを買えばいいと思う。

で、そんなこんなで作った浴槽の数は、取り敢えず三つだ。

浴槽部分は、大衆洗濯場を作る時に余ったレンガを流用した。ぶっちゃけ、見た目は洗濯槽そのものだ。だから追加で用意したレンガは、ボイラーに該当する加熱用の魔術陣の部分だけだった。

設置したのは水浴びに使っていた川の近く、もつと言えばあの試作で造った生簀の近くである。

本当は、もう少し立地の良い場所に設置したかったのだが、給水の関係上ここ以外に良い場所がなかったのだ。

浴槽への給水は竹を使っている。これは、事前に切り倒して用意しておいた物だ。この世界の竹は、日本のそれとは違い節がないため、切っただけでパイプのように使えるという利便性がある。

竹には水の流れを制御する魔術陣が刻まれており、竹の口を川にぶっ込んで魔術陣を起動させれば勢い良く水を汲み上げてくれる寸法だ。

浴槽の中には木の栓がはめられており、溜まった水はこれを抜けば排水できるという、何とも簡素な作りをしていた。

この試作風呂の目的は、あくまで「風呂の良さを広めること」であるため、特別凝った造りはしていない。凝った物を作るのは、本格的に銭湯を建てる時でいい。

ということ、折角完成したので試運転も兼ねて入ってみることにした。

大人でも十分に余裕を持って入れるように、それなりの広さと高さを備えた浴槽は、子どもの俺

たちが入るには多少縁が高い。

なので適当な石を置いて足場とした。

ちなみに、子ども一人でも用意ができるか確かめるために、グライブとリュドには俺の真似をしてそれぞれ風呂の準備をしてもらった。

最初の竹を使って水を浴槽に入れるところだけ多少手間取っていたが、そのあとは特に問題もなく準備は進んでいた。

正式に銭湯を作る時は、もっと楽な給水方式を取り入れるつもりなので、今だけは我慢してもらおう。

入れた水かさは、浴槽の七割くらいまでだ。子どもが座った時に、肩の高さまでお湯がくればいいのか、これで十分だろう。

今回、試作風呂を作るに当たって加熱システムを多少改良している。

普通は、熱源を用意して、その熱量を水へと移すことで水の温度が上昇し、お湯となる。

五右衛門風呂やドラム缶風呂なんかがその分かりやすい例だ。

しかし、この魔道具による「加熱」とは、従来の加熱という概念とはまったく違っていた。まず、「熱源」を必要としないのだ。

では、どうやって加熱するのかといえば、「水そのもの」に熱量を直接ぶち込んでいる。

イメージとしては、電子レンジでチンしている感覚に近いかもしれない。

勿論、窯元で使っているような加熱魔術陣をレンガに書き込み、レンガ自体を加熱して水を温める、という方法もないが、正直二度手間になるので止めた。

レンガを加熱する熱量をそのまま水に与えた方が、魔力の消費も少なくて済むし、熱する時間もずっと短くなるからだ。

俺が生簀で行っていた加熱実験とは、つまり「水もしくは空間そのものに、熱量をそのまま付与することはできるのか？」というものだった訳だ。

結果は見事成功。

そこで、今回は前回用意できなかった「追い炊き」機能を追加してみた。

正直、この「熱量を直接ぶち込む」という加熱方式では、追い炊きができない。いや、できないようにしていた、と言う方が正確だな。

この加熱方式には、洗濯槽と同じく「一定以上の大きさの生物が入っている場合、機能しない」というロックを掛けていた。

何故かというと……

人が加熱の効果範囲にいた場合、人体にどんな影響が出るか分からなかったからだ。

何事もなく水だけが加熱されるならそれでいい。しかし、生卵を電子レンジでチンしたらどうなるか……

俺はそれを人で試す気には、とてなれなかった。

だからこそ、追い炊きは初心に帰って基本的な方法で加熱することにした。

そう、浴槽を構築しているレンガの一部を直接発熱させる方式を、ここで採用したのだ。

ボイラー部分である魔道具の内部には、レンガ一つ分程の空間が浴槽と環状に繋がっていた。

その空間の中で浴槽から一番離れた部分に発熱レンガを設置することで、追い炊き機能を得ると同時に、高温になっている発熱部分に直接触れる危険性を減らしている。

これは日本の風呂釜とほぼ同じ機構だったりする。

「では、入ってみますかねえ。えいこらしよつと……」

前回の生簀の実験機では完全に手動まかせだった加熱時間を、今回は一定時間だけ加熱するタイマー式にした。

“ぬるい”と思う奴は、勝手に追い炊きしろということだ。

「あつたし、ロディと一緒にいっしょにっ！」

「じ、じゃわたしもっ！一緒に入るっ！」

俺が浴槽に入るや、何故かタニアとミーシャが二人して競うように同じ浴槽へと飛び込んできた。

まあ、別にいいけど……

大人だってゆったり入れるくらいのサイズにはしてあるから、子ども三人が入ったところでどうということはない。

が、三人も入ってしまったことで一気に水かさが増してしまった。

今は三人とも立っている状態だからいいが、これって、皆で座ったらザッパするんじゃないかな
いか？

勿体ない……とも思ったが、水道代を出している訳でもないから別にいいのか？

まあ、結局タニアが浴槽内でまたまた派手に暴れ回った所為で、水かさはあつという間に激減。

こぼれる前に掻き出されてしまった訳だが……この子はもう少し落ち着きを持つべきだな、うん
片やミーシャは、我関せずとばかりにほけーとした顔で俺の隣で静かに座っていた。

この子はこの子で何だか大物になりそうな気がするな……

何だかんだで、グライブやリュドにもそれなりに好評だったようで、俺たちは作業の後のひとつ
風呂を浴びてから、家に帰ることになった。

帰りは勿論俺の愛車で送ることになったのだが、“動かしたいっ！”というグライブとリュドの
たつての頼みで、運転は彼らに任せることにした。

二人で分担したため一人当たりの距離が短かったおかげか、それとも以前の経験から耐性が付い
たのか、グライブも魔力欠乏症に陥ることなく家まで辿り着けた。

リュドは何でも、簡単な魔術は日頃から使っているとかで、魔力を消費することには慣れている
らしい。

まあ、別に神父様から魔術を教えてもらっている者以外、魔術を使つてはいけない、なんて決ま
りがある訳でもないからな。

親や知り合いから、魔術を教えてもらうことだってあるだろう。

さて、では、早速今日の夜辺りから親父や妹たちを連れて入浴に行くとしますかね。

ママンは……女の人のなので流石に野外で全裸というのは抵抗があるだろうから、誘うのは止めておこう。

そう考えると、簡単な衝立くらいは用意した方がいいかな。

女性陣から、自分たちだけ入れない、という苦情が来るかもしれないしな。

でも、それは追々でいいだろう。

まずは今日家族を連れて行って感想を聞いてから、後日村人を案内して反応を確認して……要望があれば、その時にでも衝立を作ることを考えればいい。全てはそれからだ。

三話 風呂の反響

「おつふつろ〜♪」

「おふつろ〜♪」

「ふうー!!」

俺の後ろで、妹たちがへんな歌を歌っている……

昨日、初めて日本式の風呂を堪能した妹たちは、即日で風呂の魅力にハマリ、今ではすっかり風呂の虜になっていた。

今日も「お風呂に行くぞー」と声を掛けるや、「散歩に行くぞー」と言われた犬のような勢いで俺に向かって突っ込んで来たからな。

気に入ってもらえたのなら嬉しいが、喜びを体当たりで表現するのはいい加減止めて欲しいところだ。

にーちゃん、痛くてそろそろ泣きそうだよ……

ちなみに、親父からもそれなりの好評を受けてはいるが、レティやアーリー程ではなかった。

今日も、自分から進んで風呂へ行く、というよりは「子どもたちの付き添いとして同行している」といった感が強い。

と、いう訳で俺たちは今、日の沈んだ道を昨日出来たばかりの風呂場の方へと移動している最中だった。勿論、荷車で、そして運転は俺で、だ。

妹たちは荷車が大のお気に入りなようで、事ある毎に「のせてー! のせてー! のせろー!!」とせがんでくる。

本来なら、歩いても十分に近いので——だって、教会の近くだしな——わざわざ荷車で行く必要はないのだが、妹たちのそんな「おねがい」コールに俺が折れてしまった。

ウチの妹たちは宇宙一カワイイから、これは仕方がないことなのだ……うん。

そんな訳で、妹たちは大好きな荷車クララに乗ってご機嫌きげん、お風呂が楽しみで期待感アゲアゲ、興奮状態二倍というステータス異常を起こしている所為で、テンションが少しおかしな方へ飛んでいた。そんな歌ってはしゃぐ妹たちを、親父が「近所の迷惑になるから止めなさい」と窘たしなめている姿が、目の端はしにちらりと映った。

おっ？ たまには父親らしいこともするじゃないかパパン。

昼間ならどんなに騒さわごうが気にすることはないが、流石に夜ともなると辺りが静まり返る分、音が響きやすくなる。

先日も「あんたっ！ いい加減におしよっ！」と「ご、ごめんよ、かあちゃん（パリーン!!）」というどこぞのご家庭の夫婦喧嘩の聲が、ウチまで届いてきたくらいだからな。

あれは正直恥ずかしい。

そんな賑やかな荷車クララの荷台には、他に三人の乗客が乗っていた。

ハインツ一家の、ミーシャちゃん、グライプ君、ガゼインおじさんの三名だ。俺たちが丁度家を出るタイミングでかち合い、ご一緒することになったのだ。

「ロディくん、わたしに手伝えることってある？」

後ろで妹たちが、そして親父たちが楽しそうに談笑する中、ミーシャが俺の元へとやって来てその声をかけてきた。

ホントええ子やねえ。

「んじゃ、悪いんだけど、そのランプでもう少しだけ手前を照らしてくれるか？ 暗くって、道がよく見えないんだ」

「うん、分かった！」

ミーシャは一つ頷くと、俺の横に置かれていた魔術陣式石ランプを掲げて、進行方向の地面を照らしてくれた。そして、そのまま俺に引付くようにして隣に座る。

今は夜の七時だか八時だか……まあその辺りの時間だった。外灯の一つもないこの村じゃ、陽が沈めば辺りはすっかり真っ暗だ。

多少改良を加えて、光量を増すことに成功した石ランプ・改ではあったが、流石に一つでは心許ないか……

もう一つ用意するか、荷車クララに本格的な前照灯ヘッドライトを装備する必要があるかもしれないな。これからは風呂に入り、夜間の外出も増えるだろうし……

この時間帯は、いつもならそろそろベッドの中に入る時刻なのだが、昨日から寝る前に風呂に入る時間と決められていた。

この村はとにかく夜が早い。石ランプの普及に伴い、若干夜更よふかしでできるようになったとはいえ、基本、日が沈んだら「寝る」以外にすることがないからな。

しかし、昨日からは「寝る」以外に「風呂に入る」という楽しみが出来た。

娯楽とほに乏しいこの村では、「入浴」さえも一種の娯楽になる。てか、「スーパ―銭湯」なんてまん

ま“娯楽施設”に分類されてる訳だから、そもそも入浴も立派な娯楽か……

なんてことを考えながら、荷車^{クララ}を転がすこと数分。

目的地に辿り着くと、そこには一種異様な光景が広がっていた。

「……人がいっぱいいるね」

「……そうだな」

その光景を見たミーシャがこぼした呟きに、俺はそう答えるしかなかった。

そこには、人垣^{ひとがき}が出来ていた。

しかも、普段なら真っ暗で何も見えなくなるような場所が、日中のように煌々^{くわうくわう}と輝いていた。

集まった人たちが、手に手に普通のランプや俺が作った石ランプなどを持っていたのがその原因だ。

一応、風呂は夜間利用がメインということで、石ランプを風呂の周囲に数点設置しておいたものの、これなら必要ないかもしれないな。

しかし……

人気が出てくれればいいなあ、と思っていたのは確かだが、これは流石に色々と……おかしいだろ。

だって、完成したのは昨日で、俺はまだこのことを村人たちには告知していないのだ。

使い方を書いた立て看板がまだ完成していないので、その完成を待ってから発表するつもりでい

たのに……

何でもう、人がこんなに来てんだよ？

あの風呂の存在を知っているのなんて、あの場にいた俺を含めた五人を除けば、神父様くらいなものだ。

神父様には、今日の朝、試作風呂が完成したことを話していたが、そこから村人たちに話したとしても情報の拡散速度が速すぎる。

いや、たと言話を聞いたとして、いきなりこれだけの大人数が大挙して押し寄せるだろうか？

まずは様子見するのが普通だ。

で、評判が良ければ次第に足を運ぶ人たちが増えていく……それが通常の流れだと思うんだが。

取り敢えず俺は、この人だかりの先にある風呂が、今どういう状況になっているのかを確かめるべく、奥に向かって足を進めた。

“おいっ！ いつまで入ってんだ！ 早く出やがれ！” “うるせえ！ おらあ、今入ったばかりだつてんだ！” “後ろが詰まってるんだから、早くしろよな！” “でか、なんで三つしかないんだよこれ!?”

集団の先頭部分に近づくにつれて、聞こえて来たのはそんな怒号だった。

人の隙間を縫^ぬって、ようやく風呂を設置した川縁^{かわべり}まで辿り着くと、そこに広がっていたのは……裸祭りの光景だった。

数十人にも及ぶ男たちが、裸でひしめき合っていたのだ。

……あまり見ていて気分のいい風景じゃないな。これが全部美人のねえーちゃんだったら、ホクホクできたかもしれないが。

取り敢えず、誰か何かを知っているかもしれないので、近くに立っていた若い人にーさん辺りにお話を伺ってみることにした。

「あのー、ちつとばっかしいですか？」

「ん？ おお、ロランドさんとこの坊主じゃないか。どうしたよ？ お前も“風呂”の話を聞いて……って、そういえばこれを作ったのも坊主なんだってな？」

「あー、その話はまた今度ということ……それよりも、この人ばかりは一体なに？ そもそも、皆どーやってこのことを知ったんだよ？」

「ん？ ああそいつは昨日な……」

にーさんの話をまとめるところだ。

この一件の犯人は、リュドとタニア、そしてその親父であるらしい。

ここからは、にーさんの話を元にした俺の憶測だが……

昨日、俺たちと別れた後、リュドとタニアは農作業をしていた父親の元に向かったと思われる。そして、何らかの理由で父親と共に風呂のある川辺へと戻り、風呂を使った。

タニアたちのことだ。父親に作った風呂を自慢したかったのかもしれない。

その際、たぶん一緒に作業をしていた他の村人数名も一緒に連れて行ったのだろう。

タニアとリュドが、ドヤ顔で風呂の使い方をレクチャーしている姿が目に見えよう……

で、風呂を利用した村人たちが情報を拡散した。

この時の情報が“こんな物があつたよ”程度であつたなら、“ふーん、珍しい物が出来たんだ”と話のタネになるだけで、ここまでの盛況ぶりを見せることもなかったのだろうか……

どうやら、この時風呂を使った人たちは、かなり自慢げに吹聴して回ったらしい。

“あれは、良いものだ”とか“一度は使ってみるべきだ”とかね……

“そうまで言うなら、自分も一度は……”ということ、話を聞いた人たちが集まり、この状態を作っている、ということらしい。

ちなみに、サイクルが悪過ぎて夕方くらいからずっとこの状態なんだとか……まあ、浴槽三つしかないしね……

「ロディくん」

くいくいつ、と後ろから服の裾が引っ張られ、ついでに聞き覚えのある声が俺を呼ぶので振り返ると、そこには案の定ミーシャが立っていた。

「どうした？」

「んつと……おとーさんたちが“帰るから、戻ってこい”って……」

だろうな……この状態じゃ、今から並んだとして入れるのはいつになるのか。



仕方ない、今日は風呂を諦めるしかないみたいだな。俺は渋々親父たちの所へと戻ったのだが……

「……お風呂入れないの？」

と、寂しげな表情でいうレティとアリーを見て気が変わった。

「よしっ！ 今からにーちゃんが製作者権限でもって、今入ってるおっさんども叩き出して一つ確保してくるっ！ だから、ちょっと待っているがいい！ 妹たちよ！」

「お風呂入れる？」

「入れるともっ！」

「わーいっ！ おっふっろー！ おっふっろー！」

ではさっさとおっさん共を叩き出すために、また風呂の設置してある場所まで戻ろうとした時、突然ガバツとミーシャに背後から抱きつかれた。

「ちょー！ ダ、ダメだよ！ ロディくん！ そういうズルは良くないよ！ 順番は守らないとダメなんだよ!?」

どうやら、俺のことを止めようとしているらしい。

何故だ？ 何故止めようとする？ 妹たちが悲しい顔をしているんだぞ？

あの太陽のような笑顔が曇るなど、あつてはならないことなのだ！

もし、あの子たちの笑顔を陰らせるものがあるのなら、俺が全力をもってそれを排除するのみ

だあ！

「ええいつ！ 放せつ、ミーシャよ！ 妹たちの笑顔を守るためには仕方がないことなんだ！」

「ダ、ダメだよお！ そういうのは良くないよお！」

こんな体ではあるが、力づくでやろうと思えば、力のないミーシャくらい簡単に振り解くことができる。だが、そんなことをしてミーシャに怪我なんてさせたくない。

必死にしがみついて俺を止めようとするミーシャに、結局俺は何もできないまま、*「放せ！」* *「ダメだよ！」* という押し問答だけがしばらく続いた。そしてふと、あることを思い出した。

加熱魔術陣の実験に使ったあの生簀のことだ。

大人は浅すぎて無理にせよ、子どもである俺たちなら十分……とはいえないが、使えないこともない。

俺はミーシャに考えたことを話すと、四人……俺とレティ、アーリー、それとミーシャで生簀に向かった。

一応、グライブと親父たちにも話は振ったが、三人揃って *「止めておく」* という答えが返ってきた。

んで、*「先に帰る」* と言って俺たちを置いたまま帰ってしまった。

こんな時間に子どもだけにするのかよ？ とも思ったが、大きな町ならいざ知らず、な～んにもないこんな村では、今が夜で暗いことを除けば危ないことも特にないか？

俺はさつさと生簀の準備を終えると、四人で仲良く風呂を堪能したのだった。

多少浅くはあったが、反面何倍も広い *「風呂」* に、妹たちも終始ご機嫌で、これはこれで彼女たちに受け入れられたらしい。

ちなみに……

こっちの生簀の方の加熱魔術陣だが、普段は俺以外の人間が使えないようにレンガの一部を組み替えていた。

たったそれだけのことで、この魔道具は動かなくなってしまうのだ。

これは、こっちは試作風呂の方の魔道具と違って一切の安全装置がないため、危険だからに他ならない。

俺がいない間に、勝手に使ってチンされたのでは寝覚めが悪すぎるからな……

帰り道、妹たちも大満足の中、揺れる荷車クララの上でミーシャが、

「ロディくんって、レティちゃんとアーリーちゃんのことになると、時々おかしくなるよね……」と呟いていたが……

別におかしいところなんてどこにもないよな？ これって普通だよな？

ミーシャの言葉に少し引かかるものを感じながら、俺は家に向かって荷車クララをコロコロと転がしたのだった。

四話 説得と話し合い

で、翌日。

授業後、俺たちは村長の家を訪れていた。「たち」とは、俺以外に神父様にも同行してもらっているからだ。

「つてーと何か？ ロディフィス、お前はまたあの『洗濯場』みたいなもんを…お前さんの言葉を借りるなら『セントー』とかってヤツを村の中に造りたいってことか？」

「そういうこつたな」

当初の計画では、もう少し時間を掛けて推し進める予定だったのだが、嬉しい誤算というか、思った以上の速度で風呂の存在が広まり、それなりの好評を博していた。

そこで、一足飛びではあったが、早速村長にこの話を持ちかけることにしたのだ。

正直、これ以上昨日のような状態が続くとすると、俺自身が入れない。それは困る。

とはいえ、いきなり『銭湯を建てます』とはいかないので、俺の計画案を聞いてもらった上で、まずは村長としての判断を聞こうってことだな。

ちなみに、何故神父様が同席しているのかといえは、個別に説明するのが面倒だったことと、神

父様からも何かしらのアドバイスがもらえれば、と思つてのことだ。

と、いう訳で俺はそのまま計画の概要を村長と神父様に説明していった。

銭湯を造るに当たって、まず問題になるのは土地の確保だった。

これが解決しなければ、この計画は先には進まない。

少なくとも三〇人は軽く入ることができる浴槽を、最低でも二つ——男湯と女湯の分だな——は用意しなくてはならないからだ。

俺的には混浴でも全然OKなのだが、そんなことをすると女性陣から苦情が来るのは目に見えてるしなあ……

そんな訳で、体を洗う洗い場、着替えるための脱衣所なんかもそれぞれ二つずつ用意する必要がある。

それにはどうしても、ある程度の広さの土地が必要となる。しかも、できる限り水源の近くで、という条件は絶対に外せない。

川から離れた所に造つては、水路を引くだけで一大工事になってしまうからな。

広さだけなら条件に合致する場所がいくつかあったのだが、しかしそれらはどれもこれも川からはかなり離れていた。

川の近くはどこも、雑木林や傾斜の激しい地面の所為で、大掛かりな建物を建てるには不向きな

土地ばかりだった。

村の木を切り倒して空き地を作ろうにも、村の木は領主の持ち物であり商品であるため、勝手に切り倒す訳にはいかず、かといって傾斜を平^なして整地するには圧倒的に人手が足りない。

そこで登場するのが、前回リバーシを売って得た大金である。

つまり……

この金に物を言わせてしまえばいいのだっ！

木が邪魔をしているというのなら、その木を買って切つてしまえばいい。

人手が足りないのなら、労働力を買えばいい。別に奴隷を買うとかそういう物騒な意味じゃない。労働者を雇用しようってことだ。

今の我が村には、それだけの力^かがあるのだからなあっ！

ついでに、建築資材も全て購入だ。

建材となる木材は、邪魔な木を切り倒した分だけでは到底足りない。

それに浴槽に使用するレンガも、自前で用意するとなると時間がかかり過ぎる。勿論、ボイラー部分となる魔術陣の刻印された物だけは、村で生産する予定だがな。

そういった物などは全部買ってしまえばいい。なにせ、伝^つならあるしな。

リバーシの売り上げは、まだ一回目の支払いが終わっただけで、生産は現在進行形で続いている。

イスユの見立てでは、二回目、三回目とロットを重ねていく毎に、販売価格は徐々に低下し、支

払金もそれにつられて下がっていくだろう、との話だったが……

まあ、作りが簡単な商品だ。時間が経てばリバーシをマネたパチもん商品が出て来るのは必然。

そうなれば、価格競争が起きて値下げは必至、ということだ。

イスユに言わせれば、*“それを見込んでの高額スタート”*な訳だけど……

それでもまとまった収入が、少なくともあと三回は残っている。

それだけの金があれば、足りない……ということにはならないだろう……たぶん。

こうして、外部から必要な物を調達することができれば、村人への負担を減らせる。

しかも、前回、大衆洗濯場を造った時は村人の善意の協力だったが、今回は、村からの協力者にも労働に見合った賃金を供与する方向で考えている。

勿論、各自がやるべきことを疎^{おろそ}かにしない範囲での協力に限るけどな。

村での作業を優先するために、イスユからのリバーシの量産依頼を断つておいて、その村人たちが銭湯を造っていたのでは本末転倒だ。

と、というような内容を話したところ……

「……お前のやりたいことは理解した。が、村の外から人を入れることには、賛成できんな」

そう村長から言われてしまった。

神父様も渋い顔をして、*“そうですね……”*と、その言葉に同意していた。

うお……いきなりダメ出しをされたか。

まあ、小さな村が余所者を嫌うなんて、よくある話だ。このラッセ村も、例外ではなかった、ということだな。

一応、直接村長にダメな理由を聞いてみると……

村に外部の者が急に大勢入ることで、働きに来た人物の人間性に関係なく、不快に思ったり恐怖を感じたりしてしまう村人も少なからず存在している。

そしてそうした軋轢は、些細なことを切っ掛けに暴力事件にまで発展してしまう危険性がある、というのが村長の言い分だった。

勿論、そうしたことはならないように人材の選定には最大限の配慮を払うつもりではいたが、それでも所詮他人は他人。

やはり自分たちの領域に“見ず知らずの他人”がいるというのは、それだけで恐怖の対象となってしまうのかもしれないな。

生前、エアコンの設置やケーブルTVの配線等で、住んでいたアパートに業者の人を入れたことがある。まったく知らない人間が自分の部屋にいる、というのは、長い時間でなかったとしても、やはりどこか落ち着かない気持ちにさせられたものだ。

だから、村長の言っていることも分からなくはなかった。

そして、次の理由こそが最も大きなものなのだが……

これは、俺も完全に失念してた。

それが、“それだけ大勢の寝床と食事を用意できない”というものだった。

ここラッセ村は、一番近くの町や村からでも馬車で一日程離れた所にある。

そのため、一日の作業が終わったら“今日の作業は終わったので帰ってください”とはいかないのだ。

となれば、当然作業員は当面の間、村で生活することになる。

最悪、食事に關してはイスユから買うという手もあったが、寝床……寝泊りする場所に関しては、村に宿屋のような宿泊施設がまったくない以上、どうすることもできなかった。

村人に泊めてくれるように頼む、という案もなくはないが、そんな見ず知らずの他人を誰も引き受けてはくれないだろう。俺だって嫌だ。

自分が嫌なことを人に押し付けるなんて、筋が通らない。

……こりゃ、まいったなあ……まさか“そこら辺で寝ろ”とも言えないし……どうしたものか。

現状の村の人手では外部からの労働力がなければ、とてもではないが作業はできない。

収穫期を過ぎて冬になり、農作業は基本できなくなるので人手も確保できるが……それまで待つか？ しかしそれは、俺の感覚で二ヶ月以上も先の話になる。

うーむ、どうしたものか……

「で、これは俺からの提案なんだがよ、村から出て行った連中に声をかけるつてのはどうよ？ そうすりゃ、メシの問題は……まあ、変わらないが、少なくとも寝泊りする場所の問題はなくなるだ

ろ？」

俺が腕を組んでうーんうーんと唸^{うな}っていると、神父様となにやら相談していた村長がそんなことを言ってきたのだった。

この村で生まれた者の多くは、成人を迎えると近くの町や、ここより大きな村に出て行くことになる。

別に都会に憧れて上京……というのとは少し違う。勿論、中にはそういう理由で村を出る奴もいるだろうが、それが全てではない。

この村の主産業は農業だ。小麦を作ってそれを税金として、領主に納めている。支払う小麦の量は、村が持っている畑の大きさを元に決められる。

つまり、畑の大きさが変わらない限り、税として支払う小麦の量は常に一定だということだ。

それはたとえ、豊作や凶作であつたとしても変わらない。そして、税金として納めたあとの残りが村人たちのものとなる。

豊作であるなら村人たちの手元に残る量が増えそうなのだが、豊作なら豊作で役人たちに難癖^{なんへき}をつけられて結局は多く持つて行かれるので、村人にとっては手放しに喜べないのが現状だった。勿論、凶作よりは豊作の方がいいに決まってはいるがな。

で、この村は子沢山な家庭が実に多い。

ウチだって俺以外にレティとアーリーがいるし、ガゼインおじさんのところもミーシャとグライブ

で二人だ。

子どもが三人、四人なんてのはこの村じゃ別に珍しくもなんともないのだ。

その子どもたちは、小さいうちこそ労働力として必要だが、大きくなり食事の量が増えたと家計を圧迫するようになる。

畑を広げて収入を増やそうとしても、広げた分だけ税金は増えるし、そもそもこの村の土地自体が畑には適さない土地だった。鋤^くを入れるとすぐに、大小様々な石がゴロゴロと出てくるからだ。

現代日本なら、重機を使つてあつという間に開墾^{かいこん}することもできるのだろうが、この村ではそうはいかない。

畑を広げるためには、最低でも数ヶ月、長ければ二、三年もの時間をかけて準備しなくてはいけなかった。

しかし、そんな“準備中”の収穫も見込めないような土地であつたとしても、役人に“農地”だと言われたらその分の税金を払わなくてはいけなくなってしまう。

これでは、とてもじゃないが畑を広げられるものではない。

今の農地は、じいさんのじいさんたちがこつこつと少しずつ広げてきた賜物^{たまもの}なのだ。

現状では、税金が軽くでもならない限り、もしくは収穫高から税金を支払うシステムにならない限り、増収は見込めそうもないのが現実だった。

となれば……